

虹と大地と人間 : トポス / 風景と音風景

とホドス

著者名(日)	山岸 健
雑誌名	人間関係学研究 : 社会学社会心理学人間福祉学 : 大妻女子大学人間関係学部紀要
巻	14
ページ	243-261
発行年	2012
URL	http://id.nii.ac.jp/1114/00005706/

虹と大地と人間

—— トポスτόποςとホドスὁδός / 風景と音風景 ——

Rainbow, The Earth, and Human Being

— τόπος and ὁδός / Landscape and Soundscape —

山岸 健*

Takeshi YAMAGISHI

<キーワード>

トポス, ホドス, 虹, 大地, 環境, 世界,
人間, 社会, 文化, 自然, 風景, 音風景,
大地の芸術祭, 作品, 意味, 時間, 空間

<要 約>

大地を耕すこと, それが文化の始まりだ。耕された大地は, 文化そのものだが, 大地は根源的に自然であり, 文化の理解, 社会の理解, 文明や歴史の理解にあたっては大地と宇宙空間, 環境に注目しなければならない。

ふたつのギリシア語を手がかりとして人間と社会, 環境と世界, 人間の営みと試み, 作品と多元的現実, 日常生活と人生などについて考察を深めていくことによって社会学や人間学, 感性行動学, 風景や音風景の研究において新たな道と展望を見出すことができるだろう。

ふたつのギリシア語, そのひとつはトポス τόποςであり, この言葉には場所, 位置, ところ, 家, 部屋, 坐席, 集落, 大地の定点, 地点, なんらかの意味や価値が与えられた限定された空間などという意味がある。

もうひとつのギリシアはホドス ὁδόςこの言葉には道, 旅, 旅程, そして比喩的な意味で方法さらに生き方という意味がある。

社会学と呼ばれる大地にはさまざまな道や森, いろいろな地点や視点, 眺め, 風景が見られるが, 社会学をトポスそのもの, ホドスそのものと見ることができるだろう。社会学は耕された大地である。

すべては自然からスタートするのであり, そのテーマやモチーフ, 方法がどのようなものであろうと人間と自然に注目することによって人間と社会, 文化, 文明, 歴史の理解を深め

ていくことができる。

大地は、ここ、そこ、かなただが、大地にはなんとさまざまなトポスやホドス、また、多様で多彩な対象、作品などが見出されることだろう。一点、一点の作品は道具とともに人間の生活と生存、生命と生命力の結晶であり、表現だが、人間の営みと試みは、自然に学ぶところが多いことにあらためて注目したい。人びとは環境や世界、大地や作品、人びとから、多大な力を得ながら人生行路を旅しているのである。大地と空、宇宙空間、風景、音風景、いわばサウンドスケープは、人と人との絆や結びつき、人間関係などとともに人間にとっては人生を生きるための大きな力、支え、よりどころとなってきたのである。

虹ほど人間の目にやさしい、人間の感性と想像力に微妙に働きかけてくる自然現象はないだろう。虹の時間と空間、虹の大地、虹の力と印象がある。虹は大空を飾る光彩の道、ホドスであり、トポス、場所の飾り、みごとな橋である。ゲートは虹の弓という。生まれる虹、消えていく虹、虹はまことに深い時間であり、大地も空間も風景も虹によってみごとに意味づけられるのである。虹ほどみごとな風景の目はないだろう。

新潟県妻有（つまり）地方の大地が舞台となったアート・トリエンナーレ〈大地の芸術祭〉、いずれの出品作品も大地に降り立った虹なのだ。この虹は消え去らない。こうした数々の作品によって大地も風土も、自然も、人びとの人生や日常生活もゆたかに耕されてきたのである。

この地方の大地と風土においてはこの12年間にわたって新たな風景と音風景が生み出されつづけたのであり、大小さまざまな作品によって大空と大地が、また人間と人間とがしっかりと結びつけられてきたのである。



この国の大地は、命の糧を豊かにもたらし、
山では櫟^{かし}の木が、その頂きに櫟^{かし}の実をみのらせ、幹の中頃には蜜蜂が巣くう。

（中略）

種蒔きの時期を逸せず、晴雨に関わらず耕して蒔き、
畑が麦の穂に^{あふ}溢れるよう、早朝から^{はげ}励め。

ヘーシオドス

行為と受苦に生きる大地の運命^{さだめ}
でも大地から眼をあげて 顧みたまえ
描くため 言葉は地へと降りてゆくけど
精神は永遠のすみかを求めて昇りゆく

ゲート

音楽は、不思議な力に満ちた大地だ。
人間の精神は、
そこに生き、
そこで思考し、

そして創造する。

田園交響曲は絵画ではない。田園での遊びが人の心によびおこすいろいろな感じが現わされており、それにともなって田園生活のいくつかの感情がえがかれている。

沈黙を学べ、ああ、わが友よ！ 言葉は銀にも等しい。だが時にかなった沈黙は純金だ。

生命は音の振動に似ている
そして人間は弦楽器だ

夕方と朝には、人と交わること！ 家のなかですぐすのちがった生活だから、活気づいても疲れることはない。

ベートーヴェン

人生のある時期には、すべての場所が家を建てることのできる敷地のように思われるものだ。(中略)

私はどこへ腰をおろしても、そこで生活できたし、風景は私がいるところから四方にひろがっていった。家とは結局、ラテン語でいう *sedes* つまり座席のことではないだろうか？

日曜日には風向がいいと、ときどき、リンカン、アクトン、ベッドフォード、コンコードなどの鐘の音が聞こえてきた。それは原生林にもちこむのにふさわしい、かすかな、心地よい、いわば自然の旋律であった。森を越えて十分な距離をとると、その音は地平線のマツの針葉がハープの弦となってかき鳴らされているような、一種のふるえを帯びたうなりに変わる。あらゆる音は、最大限の距離をへだてて聞くと、まったくおなじ効果を生み、宇宙の堅^リ琴の振動音となる。

あるとき、私は偶然、虹のアーチのたもとに立った。虹は大気の低い層を満たし、あたりの草木を染めていた。私は色つきの水晶を透して眺めているようなまぶしさを感じた。それは虹の光の湖であり、そのなかで私はしばらくのあいだ、イルカのように生きた。

ヘンリー・デーヴィッド・ソロー

大地よ――
原初を見張れ。

ここで住むことは、地と天の間、誕生と死の間、喜びと苦しみの間、及び業と言の間に於ける人間の滞留としての住むことでもあります。

我々がこの多様な間を世界と名づけるならば、世界とは死すべき者たちが居住する家なのです。

ハイデッガー

三つの世界^{*}の過去の感動的な混合物、さらに芽や根がそして生命力が、すべて通過し、滲透し、歩行する、それが大地だ。

※ 動物界、植物界、鉱物界をさす。

人間は奇妙な実体である。重心を、自分自身の内部にもっていない。

私たちの魂は、他動的だ。魂には、直接補語のように、魂を直ちに感動させるオブジェが必要なのだ。

フランシス・ポンジュ

ところが私は、十二の音から音の全領域へと興味の範囲を広げました。ノイズをその基礎として考えました。

今、通りの音に耳を傾けています。

生じている変化とは、思想の表現や感情の体験のために音楽に依拠するのではなく、環境の音においてのみ、素晴らしい音響、美的快楽を発見しているということなのです。

ジョン・ケージ

多くの人間が母なる大地との接触を失い、精神的な「根なし草」の状態で、偽りの進歩に酔っている時代にあっては、樹木は希望の担い手となりうる。

マンフレート・ルルカー

あるいはいささ小川のせせらぎの音なども、何でもないのであってまた一つの心の頼りであった。すなわち水は常に流れているということを、耳で確かめていた数百年からの習わしが、こうして井を掘り水道を伏せる時代まで、なお我々をして泉の響きを愛せしめたのである。

柳田國男

洋楽の音は水平に歩行する。

だが、尺八の音は垂直に樹のように起る。

私は沈黙と測りあえるほどに強い、一つの音に至りたい。私の小さな個性などが気にならないような――。

私には、音と水は似たもののよう感じられる。(中略)

音楽もまた河や海のようなものだ。多くの性質の異なる潮流が大洋を波立たせているように、音楽は私たちの生を深め、つねに生を新しい様相として知らしめる。

武満 徹

感性行動学とは、人間の感性と行動という視点から、人間、社会、日常生活、人間的世界へのアプローチを試み、人間のアイデンティティ、環境世界、生活世界についての理解を深

めながら、日常生活と生活空間の創造的な構築を期する方法である。感性という視点から、現代という時代、現代社会、現代を生きる人間へのアプローチがなされるのである。(中略)

私たちの人生はかけがえのない人々や、かけがえのない音との出会いと触れ合いによって支えられている。(中略) あらためて音が人生において持つ深い意味に気づく時、私たちは、音が自らの人生を支えていることに気づくかもしれないのである。(中略)

大切なことは、再び、耳を澄まし、世界の音と対話することだと思う。

山岸美穂

＜エピグラフの出典＞

ヘーシオドス（1986年）『仕事と日』（松平千秋訳）初版、岩波書店・岩波文庫、39頁、65頁。

ゲーテ（1982年）『自然と象徴——自然科学論集——』（高橋義人編訳、前田富士男訳）初版、富山房・富山房百科文庫33、24頁－25頁、神と世界、＜乱層雲＞。

ベートーヴェン——ミッキー・ハート、フレドリック・リーバーマン編著（2002年）『音楽という魔法 音を語ることばたち』（山田陽一、井本美穂訳）初版、音楽之友社、137頁。

ベートーヴェン（1957年）『音楽ノート』（小松雄一郎訳編）初版、岩波書店・岩波文庫、11頁、18頁、20頁、71頁。

H. D. ソロー（1995年）『森の生活』上・下、（飯田実訳）初版、岩波書店・岩波文庫、上、143頁－144頁（住んだ場所と住んだ目的）、223頁（音）、下、60頁（ベイカー農場）。

『ハイデッガー全集 第13巻』（1994年）（東 専一郎ほか訳）初版、創文社、33頁（様々な合図 闘いの法則〔1941年〕）、175頁（ヘーベル——家の友〔1957年〕）。

フランシス・ポンジュ（1982年）『詩 選』（阿部弘一訳）初版、思潮社、21頁（大地）、142頁（※）、124頁（オブジェ、それは詩法である）。

ジョン・ケージ（2009年）『ジョン・ケージ著作選』（小沼純一編）初版、筑摩書房・ちくま学芸文庫、118頁（ケージの音楽）、121頁－122頁、（インタビュー集）。

マンフレート・ルルカー（2000年）『シンボルのメッセージ』（林 捷ほか訳）初版、法政大学出版局・叢書・ユニベルシタス687、287頁。

『柳田國男全集 26』（1990年）初版、筑摩書房・ちくま文庫、120頁（明治大正史世相篇）。

『武満徹 エッセイ選』（2008年）初版、筑摩書房、ちくま学芸文庫、131頁、149頁（音楽、個と普遍）、360頁－361頁（日常から）。

山岸美穂——山岸 健、山岸美穂（2008年）『日常生活と旅の社会学 人間と世界／大地と人生／意味と方向／風景と音風景／音と音楽／トポスと道』初版、慶應義塾大学出版会、321頁－323頁（8 地理教育とサウンドスケープ 豊かな生活感性を磨くために）。

社会学の社会は人間社会、社会学の方法は、人間と社会をめぐっての方法である。デカルトは道に従うことを方法として理解している。

ここでふたつのギリシア語に注目したい。まずトポスτόποςこの言葉には場所，ところ，位置，家，部屋，坐席，村や町などの集落，チャンス，職業，墓，墓地などという意味がある。大地の一定の地点，定点，居場所，心身のおきどころ……トポスにはこのような意味がある。オルトOrtというドイツ語は槍の穂先，一点，地点を意味する。集落をオルトシャフトOrtschaftという。社会学のテンニエスの場面ではゲマイシャフトGemeinschaftとゲゼルシャフトGesellschaftだ。社会と共同生活のさまざまな姿と様相，大地などが浮かび上がってくる。どのような社会も共同生活も大地との深いつながりと結びつきにおいての人間の営みと試みなのである。こうした営みと試みは，人間の行動と行為，実践（ギリシア語，プラクシス）と制作，創造（ギリシア語，ポイエシス）そのものであり，プラクシスとポイエシスの表現なのだ。

もうひとつのギリシア語，ホドスὁδόςこの言葉には道，旅，旅程，そして比喩的に方法，さらに生き方という意味がある。デカルトはこうしたギリシア語をふまえて，道——方法について思いをめぐらしていたのではないかと思う。

トポスとホドス——このふたつのギリシア語に注目しながら人間の生活と生存，人びとそれぞれの人生と人生行路，大地と人間，人間と環境，人間と世界などについて考察を深めていくことは，社会の理解を深めていくためにも必要なことではないかと思う。

オーギュスト・コントは，数学，天文学，物理学，化学，生物学という科学の発展と展開をふまえて第六番目に＜社会学＞の登場を見ている。こうした社会学こそ時代の診断と諸問題の解決に貢献しうる新たな方法だったのだ。当初からコントには人間の科学，社会の科学というアプローチと立場が見られた。生物学においては当然，人間が姿を見せる。ドーバー海峡を渡ったイギリスでは

社会学の展開においてミルやスペンサーが姿を見せているが，スペンサーは，人間は生物学のターミナルであり，社会学の出発点だ，という。

かつてのジュネーヴ共和国に生まれたジャン＝ジャック・ルソーにおいては人間において社会を，社会において人間を，という視点とパースペクティヴ（遠近・眺望・視野）が見られるが，私たちはこうしたルソーに社会学の曙を見ることができだろう。デュルケムはモンテスキューとルソーを社会学の先駆者と見ている。

ルソーの生誕250年を祝してジュネーヴで記念の催しが開かれた時，レヴィ＝ストロースは，「人類学の創始者，ジャン＝ジャック・ルソー」と題して講演をおこなったが，その席上，レヴィ＝ストロースは，モンテーニュ，デカルト，ルソー，三者の言葉を紹介している。——モンテーニュ「私は何を知っているか」。——デカルト「われ思う，ゆえにわれあり」。——ルソー「私は誰なのか」。

モンテーニュ，デカルト，ルソー，この三者の言葉は広く知られているが，あらためて注目したい言葉だ。

『エッセー』のモンテーニュは，人間については理性的動物，命に限りがある存在などという表現が見られたが，人間にふさわしい表現は，人間という言葉だ，という。モンテーニュは人間は言葉によってつながり合っている，と述べているが，そのとおりだ。だが，私たちは，人間は行動や行為によって，思いや思い出によって，記憶によって，さらに道具や作品によって，大地や宇宙空間，太陽や星によってつながり合っているといいたいと思う。人と人とのつながりと結びつき，人間と人間との絆と縁，人間関係において，集団と集団生活，共同生活において社会と社会的世界がイメージされるのであり，人と人，人間と人間，日常生活と人生においてこそ社会が，人間が理解されるのである。原点，舞台，方法として注目されるのは，大地であり，環境だ。大地は空と，宇宙空間とひとつに結ばれている。大空を旅している

太陽や星や雲は、人間と大地の友であり、伴侶、指針なのである。

太陽とともに東方と西方が姿を見せる。東から西へ、旅びと、太陽の道がある。東西南北の方位と方向は、さまざまな方向とともに重要だ。水の流れ、河川は矢印そのものであり、方向なのだ。

ここで特に注目したいフランス語がある。それはサンスsensと言う言葉であり、感覚・意味という意味群と方向という意味群がある。端的に言えば意味——方向であり、意味づけることは方向づけることだ。パリの市街地図にはサンスの地図と呼ばれる地図があり、道や通りには矢印が入っている。またパリの母なる川、セーヌ川の水面に矢印が入っている地図がある。

感覚には意味も方向も含まれており、感覚が働かなくなると誰もが途方に暮れてしまう。真暗闇、それはカオス、混沌とした状態だ。濃霧、それは白い闇、時には明るい闇だ。環境から切り離されている状態を途方に暮れるという。太陽は光源だが、自然光のほかにさまざまな光がある。人工照明があり、蛍の光がある。光も色も形も、音も時間的であり、空間的だ。環境も世界も時間であり、空間である。特に世一界は、まさに時一空間であり、時間的空間的世界なのだ。人間一時間一空間において環境や世界、大地が、また、作品がイメージされる。

目と太陽というモチーフとともに古代ギリシアが姿を見せるが、目と太陽の人、目で見て確かめることが自分の方法だったゲーテは、美を薄明と見ている。

太陽は日ごとに新しい、といったヘラクレイトスは、同じ川には二度、入ることはできない、という。生成と生成の哲学が姿を見せるシーンだ。生成と存在において生を理解したジンメルは、あくまでも糸に注目しながら人と人との相互作用と社会をイメージしつづけている。人間はさまざまな場面で糸を紡ぎ出しながら社会と呼ばれる織物を織りつづけているのであり、個人はさまざまな糸の結び目なのだ。ジンメルが見るところでは生とは過去であり未来、たえまなしの先への流れ、

溢流なのである。

〈生〉という文字と言葉から目を離すことはできない。人が生まれる、人が生きる、と書いて人生、人生はまことにおおいなる旅であり、道程だ。道しるべや地図、支え、よりどころ、目標、伴侶がどうしても必要だ。人生を旅する人びと、人間は大地によって抱かれながら、人びとのなかで、道具や作品のかたわらで、宇宙空間や大地と一体となって人生を旅しているのである。人間は日々、まことにさまざまな体験に巻きこまれながら、記憶の糸をたぐり寄せて、意味を紡ぎ出しつづけているのである。人間は意味のなかで生きているのであり、地球の大地とともに意味の大地は人間にとって根源的な支えなのだ。人間の支えとよりどころとなっているものは、社会的世界も、道具も、作品も、建造物も、さらに思想も大地なのである。

「われ思う、ゆえにわれあり」といったデカルトは、精神によりどこを求めたが、デカルトにおいては世界、場所、身体という言葉は姿を見せてはいたものの、舞台の背景にその姿を消してしまった。いま私たちが注目したいのは、世界、場所、身体という言葉だ。

世界において人間の身体はまさに中心的なトポス、場所であり、人びとはさまざまな道をたどりながら、道を探し求めたり、道をつくったりしながら、一日、一日、日常生活を築きつづけているのである。人間の生活と生存の舞台と領域、人生行路を世界と呼びたいと思う。環境にそくして、環境と対応しながら独自の世界、人間的世界をかたちづくるのが、人間の生活と生存において必須のことなのだ。

大地に姿を見せている作品、五感と想像力に働きかけてくる対象や作品、さまざまな風景や音の風景、音風景、いわばサウンドスケープsound-scapeによって、自然によって人びとがそこで生きている環境と世界は、なんと表情ゆたかな表現的世界、人間の大地となっていることだろう。

人間の生命と生命力の結晶と表現、体験と記憶、感性と想像力によってかたちづけられた、プラク

シスとポイエシスの結晶，それが芸術作品なのである。こうした作品には人間の知性も感性も，人間のヴィジョンや願望も，記憶も希望も姿を現しているのである。一点，一点の作品，対象においては，人間が，人間の宇宙的世界，生活と生存の舞台が，現前しているのだ。作品は人間の副産物でもなければ，人間のコピーでもない。人間のアイデンティティ，人間の生成と存在の結晶，＜生＞の結晶，鏡，それが作品，人間によってかたちづけられたプラクシスとポイエシスのモニュメント，作品なのである。

＜生＞，生活と生存，人生，生きること，人生を旅すること，ことごとく＜生＞だ。生成と存在，実存，まさに生である。ハイデッガーは，現存在，人間存在の本質を実存として理解している。彼が見るところでは人間は世界一内一存在であり，共同相互存在であって，人間は死への存在なのだ。

＜生＞に注目しなければならない理由は，＜生＞とともに死が浮かび上がってくるからだ。生と死は反対方向に姿を見せているわけではない。生と死は人間の生活と生存において，人生において，同一の方向に姿を見せているのである。生には初めから死がくみこまれている。死を自覚しながら人生の一日，一日を意欲的に生き生きと生きるところこそ人間の深い生き方，生存なのだ。

日が昇り，日が沈む。時間帯によって光の状態が変わる。昼と夜，光景が変わり，闇が体験される。光の状態や風の吹き具合によって風景が変わる。トポスもホドスも，場所も道もさまざまに変化する。人びとは社会的世界で人びとのなかで生きているばかりか風景や音風景のまっただなかで人生の日々を旅している。いたるところで人の顔や姿が目に触れるが，いずこにおいても前後，左右，上下にさまざまな風景が姿を見せている。大地も風景も日常生活の舞台なのだ。

顔と風景，それぞれのフランス語に注目したい。顔の正面性が注目されてきたが，視点とアプローチ，距離のとり方によって顔の起伏や立体感，顔面の地形が目に触れる。身体の部分，部分において大地や地形がイメージされる。

フランス語，ヴィザージュvisage顔である。風景はペイザージュpaysage，ペイは国や地方を意味する。風景はその地方やその土地の顔であり，相貌なのだ。

土地が変わると空の色が変わるし，光の様相や風の吹き方や風光が変化する。水の流れが変わる。分水嶺がある。大地は明らかに布地や織物，模様，図柄のような姿を見せている。さきのフランス語，サンスsens，言葉の意味，それはサンス，水の流れ，サンス，また織物においてサンスなのだ。糸が走っている方向がある。

旅びとはいずこにおいても河川の状態，水の流れとその方向，方向性に注目しなければならない。イタリアへの旅に出発したゲーテは，途中，とあるところで川を目にする。流れの方向とその先の流域にゲーテの思いが傾く。水の流れにおいてはその先の地方の流域の風景が姿を覗かせているのである。

人間の生活と生存，日常生活の考察と理解にあたってはトポス τόπος 場所や家や部屋……，またホドス ὁδός 道，旅に注目しないわけにはいかない。

社会学の源流と前史に目を向ける時，18世紀のフランスやフランスのモラリストが姿を見せるが，いうまでもなく古代ギリシア世界の哲学や文学が浮かび上がってくる。ヘラクレイトスやプラトン，アリストテレスなどとともにホメロスらが社会学前史の舞台に登場する。

古代ギリシア，神託で知られるデルポイ，デルポイのアポロンの神殿の柱に見られた言葉がある。その銘文は，＜汝自身を知れ＞この言葉は後の多くの人びとの心をとらえたのである。プラトンには「汝自身を見よ」という言葉がある。対面した時，相手の人見，瞳が鏡となって，そこに自分の姿が映って見える，という場面がある。18世紀，イタリアの歴史家，ヴィーコは，このアポロンの神殿の銘を最初の社会理論である教え，と見ている。フランシス・ベーコンにおいても＜汝自身を知れ＞という言葉が姿を見せている。

プラトンにいたって大きな転換が見られたというカッシーラーは，プラトンにもコントにも注目

している。カッシーラーは、〈汝自身を知れ〉という言葉は、コントにおいては「歴史を見よ」という言葉になる、という。

オーギュスト・コント、神学的段階、形而上学的段階、実証的段階——知識の進歩の三段階の法則だ。コントは、ルソーは形而上学的段階にふみとどまっている、と述べているが、ルソーによって社会学の扉が開かれ始めており、社会学へとつづく道（方法）が展望されることは明らかではないかと思う。

ルソーの若き日のこと、思い出だけでも楽しい思い出だが、レ＝シャルメットでのヴァラン夫人との日々があった。早朝、ルソーは日の出、姿を現す太陽を眺める。日の出のルソー、太陽のルソーと呼びたくなるシーンだ。ルソーは人間と社会や社会契約について思いを深めていった人だが、緑の発見者、ルソーの風景感覚と大地や風景、植物に寄せる彼の深い思いに注目したいと思う。

風景の発見者という時には早いところで南フランスのヴァントゥウ山（風の山だ）に登山したペトラルカが姿を見せるが、18世紀のルソーや17世紀のオランダの風景画家たちにも目を向けたいと思う。

ルソーは植物を大地の飾りと呼ぶ。大地の草花、流れていく水、水音、鳥の鳴き声、ルソーの風景、音風景だ。けわしい山道、山地、樅（常緑の高木だ）、手つかずの森、湖水、無人島、ルソーにとっての好ましい風景だ。ある時、リヨンの郊外のローヌ川かソーヌ川かのいずれかの水辺でのこと、夜鶯（ロシニョル）の心地よい鳴き声を耳にしながら眠りについたルソー、ルソーはつぎのような文章を残している（『告白』）。——「目を開けると水と緑と美しい景色」。まるで印象派の絵を眺めているような気持ちになるルソーの言葉と表現だ。印象派の第一回の展覧会が開かれたのは1874年のことだが、この展覧会にはオーギュスト・コントの肖像画が出品されている。銅版画である。

モネの絵画を目にしてセザンヌは、太陽が沈むところまで太陽を追跡したモネの目に注目してい

る。セザンヌはガスケのところでコントの言葉、「服従は進歩を可能にする」という一言が姿を見せていたシャルル・モーラスの著作を目にして、共感して、納得する。対象や大地に肉迫するセザンヌの姿が生まれる。セザンヌには風景の実証主義という表現が見られる。生まれ故郷、南フランスのエクス＝アン＝プロヴァンスのサント＝ヴィクトワール山によってセザンヌのカンヴァスが飾られている。

ルソーは、大地を人類の島と呼ぶ。「島であるような人はいない」。これは詩人、ジョン＝ダンの言葉だ。誰もが大陸につながれている、とダンはいふ。この大陸は、社会、人びとをさす。シェイクスピアでは「すべてこの世は舞台」である。役割演技者が姿を現す。ドラマ、演劇にかかわるエッセイ、文章は古代ギリシアから見られるが、そうした作品やシェイクスピアの戯曲などに社会学の淵源を見出すことは容易だ。

ドラマは、人間の行為の展開様相を意味する言葉であり、行為と演技、行為者が、社会学では脚光を浴びる。ドラマの登場人物をつぎのように呼ぶ。——*dramatis personae* ペルソナ *persona* は仮面を意味する。ペルソナは象徴的なまでに演劇そのものだ。

ところで舞台という言葉は、環境や世界という言葉とともにまことにさまざまなことを人びとに思い起こさせる言葉ではないだろうか。人生と呼ばれる旅は日常生活にあるのだが、日常生活を営むということは、大地と宇宙空間を直視し、身辺を整え、トボス、場所や地点、ホドス、道、旅を確かめ、環境と対話し、環境に働きかけながら人間的世界を築きつづけていくということだ。

舞台のなかの舞台、いわば根源的な舞台は大地であり、大地とともに家や集落や道、耕された土地、墓地、さまざまな風景、人びとの暮らしが浮かび上がってくる。自然のさまざまな営み、人間の活動、なにかもかが大地に集約されているようにも感じられる。自然そのままの大地があるが、人間の作品、人間の風景と呼ぶことができるよう

な大地や土地がある。人びとの手が入っている森林や河川がある。客観的精神（ディルタイ）が住みついているような、そうした精神の顕現と呼ぶことができる大地や大地の片隅がある。耕すことは文化の始まりだ。人間の手が入っている環境を文化と呼ぶこともある。

イタリアへの旅においてゲーテはヴェネツィアで孤独を体験している。ゴンドラにゆられながらゲーテはヴェネツィア派の絵画を思い浮かべるような風景を体験している。サン＝マルコ広場の鐘塔にのぼって、ゲーテはラグーナ（潟）や潮の満干の状態を観察する。仮面劇を観劇するゲーテ、昼間、ヴェネツィアの町なかで目に触れたような庶民の情景が舞台上で演じられていたのだった。

ゲーテにおいて戯曲というならば、『ファウスト』である。この作品の一シーン、書斎においてファウストが思い悩むところだ。——いったい初めに何があったのか。初めに言葉があったのか。それとも意味があったのか。あるいは初めに力があったのか。思い悩んだ末にファウストは、ついに答えを見出す。——初めに行為があった。

行為と行為者、人と人とのつながりと触れ合い、社会的世界、われで終始するのではなく、われわれ、他者、人びと——こうした状態と状況が浮かび上がってくるところで社会学のアプローチと方法の輝きが増す。

ゲーテはデルポイの神殿の銘、＜汝自身を知れ＞という言葉に何度となく注目しているが、こうした銘文によって人びとのまなざしがややもすると人間の方へ注がれがちになることを危惧している。他なるものに、外界に、世界の方へ、ゲーテはこうした方向性こそ人間にとって有意義だ、という立場に立っている。ゲーテとともに人間、人びと、他者、人びとのなかで、こうしたアプローチが明確になっている。人間と社会にゲーテのまなざしが注がれているが、ゲーテの自然観や自然へのアプローチ、風景にかかわるゲーテの思い、ゲーテの風景感覚にも注目したいと思う。動物、植物、鉱物、光、自然の世界についてゲーテは並々ならぬ関心を示している。まことに広大な自

然の世界とともに生活世界と呼ぶこともできるような世界が厳然とした状態でその姿を現す。

社会学の大地と原風景がゲーテに見出されることは、明らかなことではないだろうか。マックス・ウェーバーのなかでゲーテが生きている。クーリーはゲーテに理想的な社会学者の姿を見出している。パークはゲーテの『ファウスト』によって社会学の道に導かれたのである。

ルソーの影はカントに落ちているが、カントは空にまたたく星と地上の人間の世界の双方にまなざしを注いでいる。風景のなかで、大地においてという姿が、ルソーにも、ゲーテにも明瞭に見出される。色彩について筆を執るゲーテにも注目したい。明らかに目と太陽のゲーテだが、ゲーテの耳も気になる。

ゲーテの方法とアプローチ、パースペクティブの原点にあたるところに姿を現している文字と言葉がある。それは、感性という言葉だ。この感性という原点からさまざまな方向に道が延びていく。

ここでゲーテの『ファウスト』悲劇 第11部（全五幕）の第一幕の一シーンを紹介したい¹⁾。

ファウスト

生命の脈動がまた活きいきと打ち始め

霊気みなぎる暁の空に優しい挨拶を送る。

この夜もまた信を裏切ることのなかった大地は今
わが足元で新たな活気とともに目覚め
悦びをもって私を取り巻き始めている。

ひとの心を力強く奮い立たせる大地よ 汝は
この地上での最高の姿を目指せと 呼びかけるのだ——。

早朝の薄い光のなかに 世界ははや姿を現して

森は幾千もの生命の^{いのち}声に満ちあふれる。

朝霧が谷間から谷間へ 帯を引いて流れ

天上の透明な光はそれを透して低地へと拡がり

深く潜んで眠っていた樹々の枝は

香り^{かぐわ}しい谷底で目覚め 生い育つ。

ほの暗い風景のなかから 次々とあざやかに

色が生まれ
花や葉から朝露が震え滴り落ちる——
ひとつの天国が私のまわりに開けて行く。

(中略)

ならばよし 陽はわが背にあれ！
岩を泡立ち落ちる滝の姿
あの滝を眺めるうちに俺の心は歓びに満ちてくる。
ほとばしる水は岩棚から岩棚へ
千の流れ 万の流れとなって まろび飛び
宙に高くしぶきを上げて ざわめき過ぎて行く。
だが何と美しいことか この水の嵐より発して
色あざやかな虹の弓が 変転のうちに持続の姿を現す。
ある時はくっきりと描き出され ある時は宙に散って消え
^{かぐ}薫わしくも涼やかな霧となってあたりに拡がっている。
この姿にこそ人の営みは映されているのだ。
よく眼を留めて考えるのだ そうすればもっとよく判るだろう
われらは色さまざまなる反射の輝きにおいて生命と出会うのだということが。

大地の詩、自然の恵み、自然讃歌、光彩の極みと呼びたくなるようなシーンだ。自然の大きさと深さ、自然の力が風景とともに、光とともに浮かび上がってくる。自然を生きることはゲーテにとって大きな力となっていたといえるだろう。ここでは大地と森と滝、そして虹である。夜明け、早朝、光の舞台が始まる。光と光彩、色彩、目と太陽のシーンだということもできるだろう。水の嵐、虹の弓——虹は目に焼きついて離れない風景だ。

滝、落下する水、飛び散る水、水音、激しい音がイメージされる。水が落下する方向に注目したい。水は一気に落下する。勢いがある矢印だ。川

の矢印はここからそこへ、はるかかなたへと伸びていく。

ゲーテのまなざしは広範囲にわたる自然と人間と社会に注がれている。イタリアの旅においてはゲーテは自分がアルプスの北の霧の国の人間であることを自覚している。アルプスの南と北は、マックス・ウェーバーにおいてひとつの視点となっている。アルプスの北ではピアノはまるで家具のような位置を占めており、人びとの日常生活においてピアノ文化が姿を見せているのである。

環境の音を音風景と呼ぶ。音と静寂、沈黙こそ音楽の大地なのだ。人びとの暮らしにおいてはいたるところが音であり、色であり、形だ。光であり、明暗だ。

ノヴァーリスにはアイオロスの琴という言葉が見られる。風が吹いてくると自然に音が鳴り出す琴、それがアイオロスの琴だ。ノヴァーリスは、人間を風琴と呼んでいる。大地を陶冶すること、それが人間の使命なのである。ノヴァーリスの見方だ。

ショーペンハウアー、意志と知性と生命に彼のまなざしが向けられている。ラテン語、そしてギリシア語のシーンだ。知性とは *mens* そして意志は、*animus* だが、この意志 *animus* は、生命、息、心、魂を意味するアニマ *anima* に由来する。この *anima* という言葉は、ギリシア語 *άνεμος* アネモス、風にその起源が見られる言葉だ。さきのアニムス *animus* はまさに生命賦与原理であり、同時に意志、もろもろの傾向、意図、情念、感情の主体なのである。

まなざしの花と呼びたくなるようなアネモネ、それは風の花であり、ギリシア語ではアネモーネーだ。

人間は風をはらんでいる生命そのもの、生命体である。身体と精神はまちがいなく風によって貫かれているといえるだろう。身体を見失うことはできない。モーリス・メルロ＝ポンティの表現を用いるならば、身体とは、世界のなかへのわれわれの投錨のことなのであり、身体は意味的な核なのだ。われわれの身体は空間のなかに在るのではなくて、空間に属しているのだ。

意味という言葉には人間の生活と生存の様相と対象や環境や世界、大地などにかかわる人間の体験が凝縮されているのである。意味の大地は、人生を旅する人間の大切なトポス、家、部屋、また、ホドス、道、方法となっているのだ。

ヘルマン・ヘッセは幸福 Glück という言葉に特別な思いを抱いていたが、さまざまな経験や体験がひとつに結ばれている意味にも信頼感を抱いていた。ヘッセは、人間的体験、精神的体験、風景体験という表現を用いながら体験の領域を区別しているが、実際のところこうしたそれぞれの体験は相互に相当に重なり合っていることは明らかといえるだろう。

人間は環境や世界と結ばれた状態で、対象や大地と触れ合いながら、意味のなかで、生活史や過去や未来を思い浮かべながら、行動したり、行為したりしているのである。

ゲーテの『ファウスト』や『イタリア紀行』を手にしたたり、目にしたり、また、耳にしたりしている人生の旅びとは、ここからそこへと旅しながら、渦巻く意味のなかで心身を支えつづけているのである。

ショーペンハウアーは、人間を生への意志と呼ぶ。メーテルリンクは、人間を生の附託者と見ている。〈生〉こそ人間の根本的なトポスであり、ホドスであるように思われる。

ホーフマンスタールが、「詩についての対話」のなかで書き記しているつぎのような言葉に注目したいと思う。²⁾

自分自身を見いだそうとするのなら、内面へおりてゆく必要はないのだ。自分自身は外部に見いだすことができる。外部に。ぼくらの魂は、実体をもたない虹に似て、とめがたく崩れゆく存在の絶壁のうえにかかっているのだ。ぼくらの自我をぼくらは所有しているわけではない。自我は外から吹き寄せてくる。久しくぼくらは離れていて、そして、かすかな風のそよぎにのってぼくらに戻ってくるのだ。じつにそれが——ぼくらの「自我」なるもの！

人間の生成と存在、人間の生活と生存、人間の実存のきわめて深いところに触れる言葉だと思う。

自分自身、自我、虹、風、いずれも気になる言葉だ。外界や環境、世界、他者、作品、道具、大空、光、土や石や水、植物、動物などから切り離された状態にある人間はいない。宇宙空間と大地、風景は人間のかなたに姿を見せているわけではない。ここにはそれらのいずれもが姿を現している。この大地や風景がある。ここから見上げる空や雲がある。自然の光がここや私たちの身邊に射しこんできている。ゲーテは自分が立つ場所に注目している。

まなざしの向かうところに他者の顔やまなざし、道、ホドス、家や集落、トポス、大空、雲、地図、作品、水の流れ、さまざまな風景であり、手のさきに自分の手、他者の手、道具、作品、時には土や草花、さまざまな物体、物質などである。手で対象に触れることは根源的な体験だ。見るとは目で対象に触れることであり、音や音楽が耳に触れるのだ。

ヘッセには大地の草花が目に触れる喜びがあったが、彼の良き友、伴侶となっていたのは雲だった。ヘッセは、雲に特別な思いを抱いていた。

五感と想像力、感性と知性、理性、記憶、思い、ヴィジョン、展望、希望、生成と存在、もっとも深いところで生、そして死……人間へのアプローチにおいて着眼点であり、パースペクティブとなるポイントだが、人間とは限りなく深い時空間なのである。個人、個人が唯一の世界だといっても過言ではないが、人間と人間との触れ合いとつながり、絆において、大地において、環境や宇宙空間、風景、音風景などとの結びつきによって人間の生存の領域と舞台が広がり、人生と呼ばれる旅の意義がおおいに高まるのである。

リズムは意味であり、方向だ、といったメキシコの詩人、オクタビオ・パスは、人間を引き絞られた矢と見ている。発射されて常に空を切り、常にみずからの前にあり、みずからをみずからの彼方に投げ出している矢である人間は、不断に前進

しては倒れるが、一步ごとに＜他者＞であり、また彼自身でもあるのだ。パスは、＜他者性＞は人間自身の内にある、という。³⁾

人間は実体を欠いている、というオルテガ・イ・ガセーの見方に共感を抱いているパスは、引き絞られた矢という表現を用いて人間の姿を描いている。ポール・ヴァレリーには精神・身体・外界というアプローチとパースペクティヴが見られる。

エル＝エスコリアル森の修道院に注目しているスペインのオルテガ・イ・ガセーには「私は私と私の環境である」という決定的な言葉がある。ここではスペイン語の文章を合わせて紹介したい。

私は私と私の環境である。⁴⁾

Yo soy yo y mi circunstancia,……⁵⁾

いま、スペインのエル＝エスコリアル森の地を訪れた私たち家族三人の旅の日を思い出す。この大地の一点とギリシアのデルポイへの私たちの旅は、私たちにとってまことに深い時空間、大切なトポスとホドスとなって私たちの生存の舞台で生きつづけている。人間は究極的にはことごとく思い出ではないかと思う。アランは、思い出は行動であり言葉であり知覚だ、と書いている。

ギリシア人における概念の発見、ルネサンスの合理的実験、と語ったマックス・ウェーバー、レオナルド・ダ・ヴィンチが姿を見せる。そして試験的ピアノを用いた16世紀の音楽研究家において実験の姿が見られたのである。ウェーバーが語るところでは実験はこうした人びとから主としてガリレイの手を経て学問の領域に持ちこまれ、ベーコンの手を経てその理論づけを得たのである。ウェーバーの『職業としての学問』の一シーンだ。

自然がつくり出したあらゆる実体のなかで人間の身体がもっとも複雑だということに注目していたフランシス・ベーコンは、人間の身体をさまざまに変わる組成と見ている。調子が狂いやすい楽器のように思われる人間の身体には堅琴に通じるところが見られるのだ。ベーコンは、人間の精神

の小室、居間、執務室という表現で記憶をイメージしている。⁶⁾ ヴァレリーは、記憶を生きている過去と呼ぶ。

いまとここ、現在は、瞬時、瞬間、一点にすぎないわけではない。これまでの日々、生活史、過去のことごとくが、また、これから先の日々、未来が、いまとここにおいて渦巻いている。姿を覗かせている。思い出と記憶、展望と希望によって現在がかたちづくられており、記憶や希望によって現在が活性化されているのである。現在はあくまでも人間のトポスとホドスであり、まことに人間的な時空間なのだ。いまとここは、感性和想像力の、プラクシスとポイエシスの、さまざまな可能性の舞台なのである。

空にかかる虹ほど人びとの感覚と感性、想像力、記憶に微妙に働きかけてくるみごとな自然現象、驚きが体験される光彩の光景、スペクタクル、パースペクティヴ（遠近・眺望・視野）はないだろう。虹とは大地と大空を飾るみごとな花束であり、雄大な色彩の大橋なのだ。

虹の弓、『ファウスト』に見られるゲーテの表現だ。引き絞られた矢である人間、パスの見方だ。固有の人物名は不明だが、古代ローマの言葉、「私は生きている限り希望を持つ」というこの言葉に注目したいと思う。希望にはどことはなしにあいまいなところや不明確なところがあるように感じられるが、希望という言葉から目をそらすことはできないだろう。さきのゲーテの『ファウスト』、言葉、意味、力、行為という言葉がつぎつぎに姿を見せて、結局、行為で決着がついたが、人間においては、言葉も意味も、力も行為もことごとく重要だ。人生を旅する力、どのようにして、どのような時に、どのような状態でそうした力が人生を旅する人間にもたらされるのか。人びとによって、大地や風景やおおいなる自然によって人間にもたらされる力がある。

人と人との触れ合いや交わりにおいて生まれる力がある。旅することや大地や風景、景観などを体験することによって湧き出る力がある。文字や

言葉や文章、音声、音や音楽によって私たちにもたらされる力がある。さまざまな作品やオブジェや建造物などを体験することにおいて生まれる力がある。

建てることは住まうことであり、詩を詠うということは、まさに住まうことの本質そのものだ、とハイデッガーはいう。ハイデッガーは、人間を命に限りがある状態で大地に住まう者と見ている。空港を耕す農夫と自分のことを呼んだサン＝テグジュペリは、人間を住まう者として理解している。空への方向性と大地への方向性は、ひとつに結ばれているのである。大空や雲はサン＝テグジュペリの活動と行為の舞台だったが、地球と大地こそサン＝テグジュペリにとって究極の居場所、家、目標となっていたトポス τόπος だったのだ。空路、空の道、ホドス、飛行機は大地の定点、一地点、トポスに向かう方法、道、いわばホドス ὁδός だったのである。

サン＝テグジュペリには「人生に意味を」 *un sens à la vie* という言葉がある。サンス *sens* のシーンだ。

『森の生活』で知られているヘンリー・デーヴィッド・ソローは、地球は化石となった大地ではなく、生きている大地だ、という。ソローの表現では、地球は花や果実に先駆ける木の葉とおなじように生きている詩なのである。⁷⁾

ウォールデン池の近くの森のなかに小屋を建てて自然のまっただなかで大地としっかりと結ばれた状態で二年数ヶ月にわたって森と大地の生活を営んだソロー、彼の日記にも注目したい。この日記を見ると沈黙と静寂がみごとに音の大地と地平であることが分かる。その曲、「4分33秒」でも著名な作曲家、ジョン・ケージは、ソローのこの日記にヒントを得て、作曲活動をくりひろげている。静寂やノイズ、環境のさまざまな音が、ケージの作曲の大地と方法となっているのだが、ソローの生き方と方法が、ケージの音楽に大きな影を落としているのである。

環境の音、それがサウンドスケープ、音風景だが、ケージは音風景の開拓者だ。だが、『森の生

活』や日記のソローの生活と生き方、生活態度と実践におおいに注目する必要がある。武満 徹には音の大地、音の河、音の庭という言葉が見られるが、武満においては作曲は音の庭づくり、作庭だった。武満はジョン・ケージに注目している。武満の前に彫刻家、イサム・ノグチが姿を現す。環境彫刻のノグチ、彼は大地を彫刻する。その方法は石への道であり、大地や庭、さまざまなトポスへの道、ホドスだった。

ソローの『森の生活』には「音」と題された文章がおさめられている。この「音」にかかわるエッセー、試みは、音風景の研究と方法の原点と道しるべとなる注目に値するエッセーだ。大地の人ではない人はいないはずだが、ソローやルソーは傑出した大地の人である。

人間の生活と生存、音風景と風景の体験、旅において、さまざまなトポス、場所やホドス、道において、遠近感と展望、眺望、ここからそこへ、かなたへ、地平線は重要だ。人びとは、こうした遠近感や眺望によって救われてきたのである。視界ゼロは恐ろしい。壁に直面しているだけでは生きた心地がしない。

時代が進むにつれて音の遠近感が失われ、音の壁がだんだんと部厚くなってきたようにも感じられるが、耳を澄ましてさまざまな音を聴き分けながら綿密に音風景を日々、体験しながら生きるとは、大地の陶冶（ノヴァーリス）という点においても大切なことだと思う。

この世の決定的な存在、オルテガにおいてはそれは物質でもなければ魂、そのほかの特定のものでもなくて、ひとつのパースペクティブなのだ。オルテガは、人びとはありのままの自分の環境のために、世界の広大なパースペクティブのなかの正確な位置を、まさに限界を、特殊性を持つもののなかに探し求めなければならない、という。オルテガはユクスキュルの生物学に見られる環境世界へのアプローチと方法を視野に入れている。環境を救わなければ、周囲にあるものの意味をさぐらなければ、自分自身を救うことはできないのだ。こうした場面に「私は私と私の環境である」という言葉が姿を見せているのである。⁸⁾

地球を「生きている大地」、「生きている詩」と呼んだソロー、太陽系の惑星、地球、まことに広大な宇宙空間にその姿を見せている地球、この星の大地と姿から目を離すことはできない。大地と海と島、南極と北極、この星のドラマは限りなく広がり、深まる。陸水と海水がある。池、泉、沼、湖水、河川は陸水だ。地球の風景や音風景は、ほとんど限りなく変化に富んでおり、きわめて多彩、多様だ。なんとさまざまなトポスとホドスが地球の各地、各地方、各地域などに見られることだろう。さまざまな星座や星座名がある。夜空に光り輝く星はまなざしそのものだ。フランシス・ベーコンは目において鏡を、耳において洞窟をイメージしている。恐る恐る洞窟に近づくレオナルド・ダ・ヴィンチ、洞窟は好奇心がかきたてられるようなトポス、場所だった。大地を描くことからスタートしたレオナルド、その絵画作品のなかには洞窟（岩窟）を舞台として聖母子などが描かれた絵がある。モナ・リザを描いた時、レオナルドは、山岳風景や道や橋を背景に描いている。

遠近法が絵画の手綱となっていたレオナルドにおいては鏡は絵画の出来具合を確かめるための方法となっている。レオナルドの五感と想像力、観察力に注目したい。

詩とは言葉であり、音声であり、意味である。リズム、形式、こうした詩には人間の生活と生存にかかわる人間の営みが凝縮されている。環境や世界、宇宙空間や大地が人びととともにつねに姿を現している。人びとの暮らしと人生、自然も歴史も詩に結晶している。

自然そのままの大地、トポスやホドスとしての大地、集落、家屋敷、庭や庭園、境内、校庭、公園、遊び場などとしての大地、原野、野原、耕地、住宅地、市街地としての大地、森林、高原、山麓、盆地、平野、稲田、里山、棚田などとしての大地——大地は人間の行動と活動の、プラクシス（行為、実践）とポイエシス（制作・創造）の、人間にとってのパースペクティブの源泉と舞台であり、また、大地は風景と音風景、景観、歴史的風土の母胎、根底なのである。

大地、風土、風景、音風景は、大空と人びとの

暮らし、日常生活と人生によって意味づけられており、いたるところに風の道、光の道が見出される。自然と文化、人間と社会、歴史と時代は、重なり合うような状態で大地において結ばれており、大地のそこ、ここ、いずこにおいてもみごとな模様や図柄、光景が生まれている。人びとの暮らし方、人生行路を旅する方法、ローカル・カラーゆたかな生活文化ほど私たちにとって注目に値する大地の姿、人間の風景はないだろう。

稲束をいくつもゆわえて、稲穂を上にして、稲束の下の方を開きかげんにして大地に、田圃に立てる方法、一定の間隔で田圃に支え木を用意して、その支え木に横棒を渡し、その横棒につぎつぎに稲束をかけていって、稲束の列が姿を見せる稲束の乾燥の方法、そして田の畦道や道に一定の間隔で姿を見せている直立している木の幹が目につくそうした稲のはざかけの木々に何層にも横木をゆわえつけて、そうした横木に何段にもわたって稲束をかけていき、そこに立木に支えられた稲束の屏風が姿を見せる風景——刈り取られた稲束の乾燥方法に見られる地方、地方のローカル・カラー、さまざまな方法がある。秋になると米どころ、越後平野には稲束の屏風と呼びだくなる風景、景観が姿を現す。和辻哲郎は、人間存在のなかの光景を景観と呼んでいる。和辻においては人と人とのつながりや絆、触れ合いが体験される空間が根本的空間であり、和辻がみるところでは家屋敷、集落などが定位された空間、風土が環境的空間、麦畑や稲田、市街地などが等質的空間なのだ。トポスには和辻の目がいきとどいている。

2012年9月12日、水曜日、私たちは一泊で新潟県の妻有^{つまり}地方に向かった。信州の川、千曲川は、県境から新潟県に入ると河川の名称が変わって信濃川となる。飯山線が姿を見せている地方だ。信濃川の河岸段丘や里山や棚田が姿を見せている大地である。

上越新幹線で越後湯沢へ。ここでほくほく線の電車に乗り換える。六日町からがほくほく線の本線だ。十日町へ。途中下車してキナーレへ。

ミュージアムだ。2000年から三年に一度、開催されてきた＜大地の芸術祭＞の主会場のひとつ、それがキナーレだ。今年、第五回目のトリエンナーレにおいては、このキナーレは面目を一新して、このトリエンナーレの注目される作品の舞台となっていた。

＜大地の芸術祭＞は広範囲にわたる妻有地方の大地が作品の展示の舞台となった地域や地方の生活と文化の振興がその目的となっている大地と芸術の祭典である。プラクシスとポイエシスの結晶であるオブジェや作品、さまざまな試みや方法、驚くべきほど広範囲にわたる多様な創造的な試みと営み、それらがこれほどまでに大空のもとで、大地や環境と緊密に結ばれた姿で人びとの五感と想像力に迫ってくる芸術作品の舞台は、ほかには見られないだろう。

＜大地の芸術祭＞は、大地と作品、人間の試みと営みのよみがえりであり、人間の生活と生存の、人間の可能性とさまざまな力の、新たな発見なのである。＜大地の芸術祭＞は、人間の五感と感性、想像力と創造力、人間と大地に加えられたショックであり、人間の生活と生存の舞台、人間の大地、自然と人間、作品にかかわる新たな展望とパースペクティブなのだ。

十日町からのほくほく線、まもなくして電車は信濃川の鉄橋を渡る。松代に向かう車窓の右手方向には下流に向かう信濃川が見える。水面が輝いていた。下流へ、下流へと向かうと越後川口、小千谷、やがて市城が拡大して山古志から海辺の寺泊までが市城となった長岡だ。中越地方を流れた信濃川は越後平野の稲作の大地を貫流して、新潟で日本海に流れ注ぐ。新潟港はこの川の河口にある。

ほくほく線と飯山線は十日町で交差している。上越国境から流れてきた魚野川は、越後川口で信濃川に合流する。川は川と川である。人は人と人なのだ。人間は大地に抱かれた状態で人と人との絆と縁、人間関係、また、家族生活や郷土生活において、故郷とその大地において人間なのだ。

私たちは松代で下車、駅近くの農舞台やその周

辺のアート、さまざまな作品を体験してから、宿の迎えの車で＜雲海＞に到着した。この宿のすぐ近くにも＜大地の芸術祭＞の作品が姿を見せており、こうした作品とともに松代の芝峠の大地と空が体験されたのである。

夕方、かなたの空の色がいくらか暗くなって、ルームのヴェランダからいままで目にしていたことがないようなすばらしい虹の柱、虹の根もとを眺めることができたが、ほんとうに幸運な夕刻だった。五時半すぎから六時少し前まで夢幻の美しい景色と呼びたくなるような光彩の光景、落ち着いた姿で大地に根をおろしているようにも見えた虹が体験されたのである。この虹の柱は少し時がたつとその姿が変わっていき、しだいに大きな虹の橋、「虹の弓」（ゲーテ『ファウスト』）が夕暮れ時の大地と空に見られたが、この「虹の弓」の右方向にもうひとつの虹が姿を見せていた。それは色が淡くて力強い虹の姿ではなかった。

大地から空へ、空から大地へ、虹はみごとなまでに彩られた空の道である。虹は大地と大地とを結ぶ絆だ。絆、糸、絲、虹ほどはっとするような美しい糸の眺めはないだろう。大空を飾る、しかも大地の風景である虹は、人びとにさまざまな思いを抱かせる自然のすばらしいプレゼントなのだ。消えていく虹のドラマがある。

光景として、アイ・ストップとして、風景の目、大地と空の焦点として虹ほど美しい現象はないだろう。絵画作品に描かれた虹がある。絵画とは花であり、虹である。絵画作品は光景であり、人間の現前、人間の生成と存在なのだ。

大地を飾る数々の作品、オブジェは、空と大地とを結ぶ絆であり、人間と人間とを結ぶ絆、道なのだ。一点の作品によって新たなトポスとホドスが生まれる。＜大地の芸術祭＞の作品やオブジェ、いろいろなトポスは、いずれもトポスとホドスとがひとつに結ばれた人間の貴重な試み、営みなのである。妻有地方の大地や里山、棚田、空家、かつての校舎、民家は、作品やオブジェによって、作品そのものとしてよみがえったのである。驚異の大地、ゆたかな感性と想像力の大地が冬ともなれば雪深いこの妻有地方に生まれたのである。

大地と芸術，人びととアート，妻有地方の大地はまことにゆたかな人間的な表情が体験される大地，ヴィザージュvisage 顔とペイザージュpaysage 風景の心はずむ大地となったのだ。顔となった大地，それが風景だ。

松代には星峠と名づけられた峠がある。地球は星だが，夜空に輝くまなざし，星がある。

星峠，芝峠，里山，棚田の松代，ほくほく線のこの駅周辺はアート・トリエンナーレのひとつの中心だ。

＜大地の芸術祭＞の松代ステージ，松代駅のすぐ近くを流れている渋海川を越えてその向こうの里山に棚田が見られるが，この棚田にはイリヤ／エミリア・カバコフ，カバコフ夫妻のインスタレーションの作品，「棚田」（1999年－2000年）がその姿を現している。季節ごとの農民の生活と労働が主題となってファバーガラス，わずかに半透明な素材が用いられて，平坦なレリーフ，くりぬかれたように見えるオブジェが棚田の大地に飾られている。黄色と青色のレリーフだ。農舞台にはこの「棚田」を眺めるための舞台，みごとな視点が設けられており，この視点の目前には高さがある銀色の金属枠が取り付けられている。この枠の内側には細い針金が張られており，それぞれ縦4行ずつの5つのテキスト，言葉がそこには書かれている。全テキストは4×4cmのステンレス製の漢字，文字であり，枠と同じく銀色だ。このテキストのかなたに「棚田」が姿を見ている。棚田の「棚田」への方向性と見ること，視点が体験されるトポスが生まれている。

星峠の棚田は特に名高いが，芝峠をこえて桐山に向かうところにも棚田の景観の大地がある。2011年3月11日の東日本大震災によってこの棚田が破壊されてしまい，今回，桐山を目ざした時にはこの棚田の修復工事がおこなわれていた。桐山に向かう途中，稲束の屏風の骨組が道端の眺めとなって私たちの目に触れた。稲のはざかけのための横木が何段も見られる立木の列が見られたのである。やがて稲刈が終わると道沿いに稲束の屏風が姿を現す道，ホドスだった。立ち並ぶ立木，

そうした木々にゆわえつけられた何段もの横木，＜大地の芸術祭＞の出品作品ではないが，大地のアートのひとつの原型が里山の大地と道に見られたのである。

テンニエスのゲマインシャフトには大地や農民，トポス，家族などが姿を見せている。彼がいうゲゼルシャフトにおいては商人やビジネス，道，旅すること，ホドスなどが浮かび上がってくる。

2000年，2003年，2006年，2009年，そして今回，2012年，各回の＜大地の芸術祭＞においては，妻有地方の各地，各会場，それぞれの大地で現代社会のさまざまな姿と変わりゆく時代の姿が，人びとによって体験されてきたのである。

虹は色の川であり，色の橋である。虹はパレットや絵画の，色彩の原風景だ。風景は大地の眺め，光景だが，虹は大地と大空のドラマなのだ。虹が姿を現し，やがて虹が消えていく。虹の時間は人びとに深い思いを抱かせる自然の時間だが，人びとの記憶の道しるべとなっているような虹があるし，人びとの旅や人間的時間を飾っている虹がある。

昭和42年，1967年の秋，イギリス留学のおりにカンタベリーからロンドンに向かう列車の車窓，右手に美しい虹が姿を現していた。忘れがたい光景だった。

多摩の大妻女子大学のキャンパスでみごとな虹を目にしたことがある。その虹は町田市の小山田方面の谷戸にかかっていた虹である。

2009年9月，第4回の＜大地の芸術祭＞に東京から日帰りで出かけた時のことだが，帰途につく時，松代駅のほくほく線のプラットホームで十日町方面の里山に虹が姿を現した旅を思い出す。虹は限りなくアートに近い自然現象だと思う。

虹ほど人びとの目をとらえて，人びとを見ることに誘う現象はないだろう。虹は人間の感覚と想像力に静かに，深く働きかけてくる。虹に向かうまなざしは，晴れがましいまなざしだ。

＜大地の芸術祭＞の出品作品は，時間と空間と人間への，宇宙空間と大地への，環境への，風土

と人びとの暮らし、トポスとホドスへのチャレンジであり、さまざまな現実と風景、音風景の創造、現出である。そうした作品と制作活動、人間の創造的な営みと試みは、まさに自然の讃歌、大地の讃歌、人間の讃歌なのだ。それぞれの作品は、自然と人間を、また、大空を結ぶ虹であり、ことごとく人間の生活と生存の詩なのである。作品となった虹は、消え去らない。

色彩は光の行為だ、また、感覚は欺かない、判断が欺くのだ、というゲーテ、『光学論考』付録(図版集)、その表紙の木版画が興味深い。ゲーテ下絵の木版画であり、虹のアーチ、弓のなかに太陽の眼、世界の眼をあらわすゲーテ自身の右眼、プリズム、ルーベが描かれており、太陽の光輝と雲のようなもの、大地、地表と風景が姿を見せている画面だ。目と太陽、まさにゲーテその人が虹によって彩られており、虹によって意味づけられているようなコンポジションだが、光と目と色彩がモチーフとなっているような作品だ。⁹⁾

虹が描かれている絵画がある。ロンドンではコンスタブルの絵画に虹が姿を見せていた。

シェイクスピアの演劇、「ハムレット」の一シーン、あやまって水の流れに落ちてしまい、水に流されていくオフィーリアの姿を描いたミレイ(Sir John Everett Millais, 1829-1896)に目が不自由な少女が描かれた絵画作品がある。——The Blind Girl, 1854-56, oil on canvas 82.6 × 62.2cm Birmingham City Museums and Art Gallery.¹⁰⁾

この絵の手前部分には膝の上に小さな楽器、アコーディオン(手風琴)をのせたまま、一点に蝶がデザインされた大きなショールを頭の方から肩、腕まで掛けて両手を大きく広げているように見える少女が描かれている。目は閉じられたままだ。この少女にもたれるような姿で年下の少女が描かれており、この少女のまなざしは黒々とした空に弧を描いている虹に注がれている。二重の虹であり、外側の虹は色彩も形もうっすらとしている。この二人の少女の背景には穀物畑か野原かと思わ

れる大地が描かれており、動物や鳥が姿を見せている。平地の向こうは小高い丘となっており、丘の麓には道があるようだ。この丘の上には点々と大小の建物が見える。丘の斜面や丘の上には樹木がところどころに見える。集落(トポス)の風景、景観が姿を覗かせているコンポジションだ。ここからそこへ、かなたへとまなざしが広がる。この絵には虹の弓や橋が広々と全面的に描かれているわけではない。丘の後方に大地と触れ合っているように見える二重の虹が描かれている。虹の根もとともいえる虹だが、大きく広がっている虹の弓、虹の道、ホドスがイメージされる。

年上の目が不自由な少女に虹を眺めている少女は、光と色のスペクタクル、みごとな虹について語っているのだろうか、あたりには静寂の気配が漂っている。

虹の大地、トポスとホドスの大地、人間の大地、五感と感性、想像力の大地、静寂と音の大地がイメージされる。二人の少女は、道端でにわか雨、夕立が過ぎ去るのを待っている。雨音はどのような状態で少女たちの耳に触れているのだろう。人と人との絆と結びつきに私たちのまなざしが注がれる画面だが、夕立をともなった虹は、みごとなアイ・ストップであり、大地の、風景の目となっている。

この年上の少女の耳にはどのような音が触れているのだろうか。少女はこの楽器でどんな曲を演奏して音楽を楽しんでいるのだろう。

人間は意味のなかで人生の日々を旅しており、人間の生活と生存、人生行路は、意味の大地によっても支えられているのである。こうした意味の大地や意味は、どこまで虹色を帯びているのだろうか。意味は光や色や音によっても貫かれているのである。

越後、新潟県出身の良寛には「天地」という文字、言葉が姿を見せている書がある(江戸時代、秋山順一郎氏寄贈、根津美術館)。まるで水の流れがイメージされるような文字づかい、書体だ。方向性が確かな風景が体験される。天地、天と地とともに人が浮かび上がってくる。良寛は凝縮さ

れた文字と言葉に身心を委ねている。人間にとって文字も言葉も大地なのである。さまざまな文字や言葉には風景や音風景がにじみ出ている。

文 献

- 1) J. W. ゲーテ (1999年) 『ファウスト』 (柴田 翔訳) 初版, 講談社, 285頁－288頁。
- 2) ホーフマンスタール (1991年) 『チャンドス卿の手紙 他十篇』 (檜山哲彦訳) 初版, 岩波書店・岩波文庫, 130頁, 詩についての対話。
- 3) オクタビオ・パス (2001年) 『弓と豎琴』 (牛島信明訳) 初版, 筑摩書房・ちくま学芸文庫, 278 頁。
- 4) オルテガ (1968年) 『ドン・キホーテに関する思索』 (A. マタイス, 佐々木 孝訳) 初版, 現代思潮社, 26頁。
- 5) José Ortega y Gasset (1983), Obras Completas Tomo I, Madrid : Alianza Editorial, p.322, Meditaciones del «Quijote» (1914).
- 6) ベーコン (1974年) 『学問の進歩』 (服部英次郎, 多田英次訳) 初版, 岩波書店・岩波文庫, 146頁。
- 7) H. D. ソロー (1995年) 『森の生活』 下, 初版, 岩波書店・岩波文庫, 248頁。
- 8) オルテガ (1968年) 『ドン・キホーテに関する思索』 (A. マタイス, 佐々木 孝訳) 初版, 現代思潮社, 24頁－6 頁, 読者に。
- 9) J. W. ゲーテ (1982年) 『自然と象徴——自然科学論集——』 (高橋義人編訳, 前田富士男訳) 富山房・富山房百科文庫33, 48頁, 117 頁。61頁 (『光学論考』 付録 (図版集) 表紙木版画)。
- 10) Russell Ash (1998) Sir John Everett Millais, London:Pavilion Books Limited.



虹と里山
十日町市松代, 芝峠, 〈雲海〉にて
2012年9月12日



イリア／エミリア・カバコフ
「棚田」(1999年－2000年)